

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）

研究期間：2018～2021

課題番号：18KT0081

研究課題名（和文）作成者・使用者からみた伝統建築用語の変遷に関する研究：オラリティからリテラシーへ

研究課題名（英文）A Study on the change of traditional architectural terms through an inspect of makers and users

研究代表者

中西 大輔（Nakanishi, Daisuke）

京都府立大学・生命環境科学研究科・研究員

研究者番号：20727672

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は江戸時代まで各地で使用されていた建築用語が明治時代になって統一されていく過程を明らかにしようとするものである。具体的には、（1）江戸時代の伝統建築用語の収集を行ない、神事の道具と同じ名称の部材が現在のどの部材に当たるか検討した。（2）現代の建築用語の把握を行ないデータベース化した。（3）明治時代の建築史学確立期の大工について調査し、伝統建築保存の技術者養成状況の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在使われている建築用語の起源を理解することにより、当時の人々の用語や用語が示す建築に対する考え方が明らかになる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify how traditional architectural terms changed. These were standardized in the modern age, although they were varied from area to area in the Edo period. To clarify the change, this paper is collecting architectural terms in the Edo period, digitizing of the terms, and research into training of engineers in the modern age.

研究分野：日本建築史

キーワード：上賀茂神社 岡本虎十郎 青木利三郎 江戸時代 明治時代

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1．研究開始当初の背景

近世以前に各地で使用された伝統建築用語には話し言葉や見た目を重視したものが多い。これら伝統建築用語は近世後期から明治前期にかけて大きく変化したが、当時の状況には不明な部分が多い。そのため、建築用語のもっていた歴史性は多くが不明となっている。

例えば、江戸時代には上賀茂神社門前の住宅に対して「農家は屋根の「両コマ葺き」を禁止する」という規制があった（引用文献）。これまで上賀茂の民家は絵図に描かれている姿から入母屋造と考えられてきた（引用文献）。一方、上賀茂神社神官の住宅が周辺の農家から未分離であった時代に「コマ」の藁を「繕」う」という記述がみられることから当時の上賀茂の住宅は寄棟造であることが推定されている（引用文献）。同論文でも指摘されているとおり「コマ（小間）」は京都の一部などで使われていた言葉で妻面を指す（引用文献）。そのため、「コマ葺き」は妻面にも屋根が葺かれたものであると考えられる。このとき、「コマ葺き」は基本的なものとしては寄棟造か入母屋造であり、上賀茂でその屋根形式が禁止されていたということになる。ところで、「コマ葺き」の「コマ」に「駒」が当てられている事例があった。もし「コマ」が三味線の「駒」に由来しているとすれば、その形状は入母屋造に近い。「入母屋造」が構造形式に由来しているのに対して、「コマ葺き」は見た目に由来していることになる。そして、絵図に描かれた民家は入母屋造ではなく背面が切妻造となる片入母屋造であったと考えれば、絵図の描写とも一致する。

歴史的な建築の実態を明らかにするためには、このような用語について近世以前の事例を収集するとともに、どのような過程で現在の伝統建築用語にまとめられていったのかを明らかにする必要がある。

2．研究の目的

本研究の目的は、近世以前の伝統建築用語が近代以降になって論理や抽象性を重視したものに統一されていく過程を明らかにすることである。そこで、伝統建築用語の作成者・使用者という視点から、

- （1）伝統建築用語の収集
- （2）現代の建築用語の把握
- （3）伝統建築保存の技術者養成

を検討した。

（1）伝統建築用語の収集

現場における伝統建築用語の使用についての個別事例はほとんど明らかにされていない。そこで、伝統建築用語を実際に使用する現場である寺社の史料から寺社の営繕活動を調査し、江戸時代の伝統建築用語を収集した。

（2）現代の建築用語の把握

現在の辞書にみられる伝統建築用語にはどのようなものがあるかを明らかにした。

（3）伝統建築保存の技術者養成

地域の伝統建築用語の実例、統一・消失経緯は多くが不明である。そこで、用語の転換点となる明治時代の建築現場においてどのように建築活動が行なわれていたのかを調査した。とくに、青木利三郎を対象とした。明治時代、木子清敬が建築史学確立にあたり京都その他で社寺の調査を行なっている。この調査に参加したのが京都の大工林宗栄と青木利三郎であった。

3．研究の方法

寺社、大工家等に伝来した古文書と当時の行政文書を用いて以下の3点を検討した。

（1）伝統建築用語の収集

歴史的資料のなかでどのような用語が実際に使われていたのかを調査した。具体的には、上賀茂神社・下鴨神社・万福寺に関する建築活動を調査した。このほか城郭と橋梁に関する用語も対象とした。

（2）現代の建築用語の把握

現代の辞書中にみられる用語にはどのようなものがあるのかを調査した。具体的には建築大辞典を主な対象とした。

（3）伝統建築保存の技術者養成

明治時代の建築技術者について調査した。具体的には、建築史学の成立期における建築技術者の養成事例から、建築技術者青木利三郎がどのような人物であったかを調査した。

4. 研究成果

(1)(2)(3) それぞれの主な成果を挙げる。

(1) 伝統建築用語の収集

上賀茂神社の古文書のなかに神道用語を用いたと思われる部材名称を発見した。上賀茂神社では1700年前後に棟形式が変更されていた(引用文献)。この変更にあたり作成された注文書のなかに「みてくら」という部材名があった。この「みてくら」を除いて箱棟の形態を復元したところ、「繋ぎ」と「箱棟受け」という部材が不足していた。この「みてくら」は神事の道具であり、「繋ぎ」と「箱棟受け」と形態の上でも類似が認められた。したがって、「みてくら」は「繋ぎ」と「箱棟受け」に相当することがわかった。

(2) 現代の建築用語の把握

建築大辞典に収録されている用語を中心にデータベースを構築した。このデータベースには上記(1)で収集した用語についても随時登録することとしている。さらに、この過程で発見した歴史的資料のなかでの用例も記録することとしている。なお、データベース構築にあたり、交流会会場において言語学に関する貴重な助言・情報を得た。

(3) 伝統建築保存の技術者養成

青木利三郎の明治26年(1893)の活動の詳細が明らかになった。以前から木子清敬の調査に参加した2人の大工のうち林宗栄が図面作成にあたって中心的な役割を果たしたことが知られていたが(引用文献)、青木利三郎については不明な点が多かった。これに対して、青木利三郎が相国寺付近を拠点としていたこと、家族のなかにも寺院の再建に従事するような人物がいたこと、青木利三郎による製図事例が従来知られているよりも多かったこと、製図の対象が社寺だけでなく洋風建築などにも及んでいること、社寺の修理・再建・新築にも携わっていたこと、このような技術と経験のもと規矩術・製図などによる後進の育成を行っていたこと、が明らかになった。さらに、弟子も指導の一環として、また職務として、洋風建築の建築や社寺修理に携わっていたことがわかった。

<引用文献>

拙稿「片入母屋造と身分階層について 賀茂別雷神社による建築規制」『日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)』平成28年8月

『上賀茂町なみ調査報告』京都市都市計画局、昭和53年3月

新谷昭夫「京都・上賀茂の岩佐家住宅の変遷について」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)』昭和61年8月

日本建築学会民家語彙集録部会『日本民家語彙集解』日外アソシエーツ、1985年10月

拙稿「賀茂別雷神社における箱棟の採用」『建築史学』77号、2021年9月

稲葉信子『木子清敬と明治二十年代の日本建築学 近代日本における建築の伝統の継承と展開の過程』東京工業大学学位論文、私家版、1989年9月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中西大輔	4. 巻 75
2. 論文標題 弟子岡本虎十郎を通して見た青木利三郎について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築史学	6. 最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------